



浅間(あさま)神社側からの大拝殿



神部神社側からの大拝殿

1 静岡浅間神社 平成令和の大改修中

静岡浅間神社は40年ぶりに20年かけて化粧直しをしています。平成26年に始まり、順に行われていまして、このほど神部(かんべ)神社・浅間(あさま)神社の楼門の漆塗り替え工事が完了しました。

当神社には国の重要文化財が26棟あり、当楼門もその一つです。神社側の説明によると、「工事予算は当初30億円見込んでいましたが、50億円位かかるだろう」と説明されていました。また、「工事費用の負担割合は、国が70%、県・市・神社が各10%」とのこと。「工事費が多額にかかるのは本漆など良質な漆を大量に使うからだ」とのことです。これらの彫刻は信州諏訪の立川(たてかわ)流一門が携わったとされています。



舞殿を中央に臨む楼門



総門を遠くに臨む楼門

2 楼門の塗り替え工事

楼門工事は3年程かけて行なわれ、見違えるほどの鮮やかさでお披露目されました。総漆塗りの極彩色の楼門は、舞殿をはさんで神部神社・浅間神社の大拝殿につながる重要な門です。楼門の入口側の両脇には隨身を配置する寺院建築の伝統的な様式を採用しています。資料によると、明治初年度に神仏分離令が公布されるまでは仏像も置かれていて、楼門の東の総門にはその一対の仁王像が2躯ありましたが、今は臨濟寺に移設されています。「当楼門は15m近い高さの大きな建造物であり、30を超える漆塗りの工程ということもあり、952kgの漆を使用した」とのことです。しかも「金箔(1枚10.5cm四方)が楼門だけで2万2千枚使用しているという豪華さ」とのことです。「当楼門の工事費は約4億1千万円。立川流彫刻数111箇所」とのことです。



子に乗せて泳ぐトラ



親トラを待つ子トラ

3 楼門の虎の彫刻

楼門の1階上部(入口・出口両面)には「虎の子渡し」の彫刻があります。「『木鼻の獅子』が金箔を押しした上に色彩を施した生彩色(いけさいしき)の彫刻であるのに対し、この『虎の子渡し』の彫刻は胡粉(ごふん)の上に岩絵の具などで仕上げる『平彩色(ひらさいしき)』で仕上げられています」と説明がありました。「虎の子渡し」の物語とは、「虎は3匹子を産むと内1匹はヒョウが生まれ、油断していると他の2匹を食べてしまうそうです。そこで川を渡る時など、この彫刻のように青い眼のヒョウを他の2匹の白い眼の虎と一緒にしておかない工夫をしているのだ」ということです。



[大歳御祖神社拝殿](#)



[大歳御祖神社楼門](#)

4 大歳御祖神社の漆塗り替え工事

静岡浅間神社の平成令和大改修は、20年かけて行なわれています。その最初の漆塗り替え工事が大歳御祖神社であり、平成26年度に着工して同28年11月に完了しました。「次に工事をした少彦名(すくなひこな)神社と併せて5億5千万円の費用が掛かっている」とのことです。当神社は江戸時代後期に完成しているが、昭和20年の第2次世界大戦の戦災で、拝殿と楼門は焼失していて、現在の建物はその後再建したものです。しかし、「楼門の中にあつた隨身2体は当時の神官の方々や近所の人々の協力で運び出されて無事で幸いにも現在に残っている」とのことです。



[少彦名神社の拝殿](#)



[少彦名神社幕股のトラ](#)

5 少彦名神社の工事

少彦名神社の漆・彩色塗り替え工事は、大歳御祖神社の次に行なわれました。その工事完了時期は平成30年3月です。今回の浅間神社・神部神社の楼門の時と同様、当時そのお披露目が行なわれました。当神社の特徴は明治初期に神仏分離令が公布されるまで、「神宮寺薬師社」と呼ばれる寺院が建っていて、薬師如来や十二神将や日光・月光菩薩が安置されていました。

社殿四面の幕股(かえるまた)には、「十二支」の彫刻がほどこされています。外側に前後3カ所ずつ、左右2カ所ずつ合計10箇所と内側に2カ所です。正面の彫刻がここでも虎なのです。静岡浅間神社は徳川家康とゆかりが深く、徳川の家紋がいたる所に見受けられますが、一説には写真のように「虎が正面中央にきているのは家康公が生まれたのが虎年ということに因んでいる」と言われています。

取材: 静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男